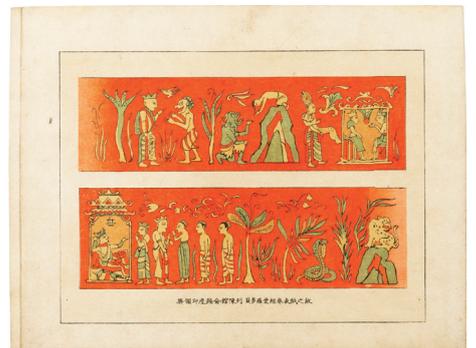
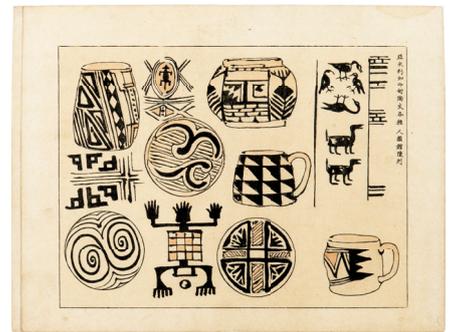
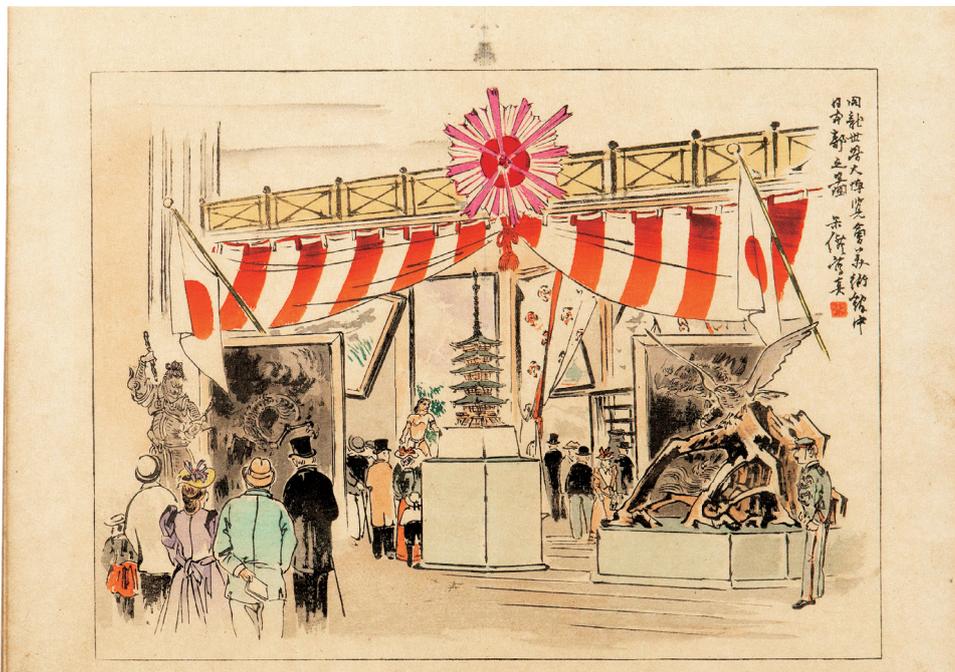


# 郷土博 通信

No.13

2019 春



『閣龍世界博覧会 美術品画譜』(解説8頁)



## CONTENTS

■ 『閣龍世界博覧会 美術品画譜』	1	■ 『閣龍世界博覧会 美術品画譜』について	8
■ 展示室紹介	2~4	■ INFORMATION	8
■ 人形をめぐる対談『人形—この未知なるもの』	5~7		



# 第1展示室

## 瀬戸内海の誕生 —旧石器から縄文へ—

瀬戸内海は古代より北部九州と畿内を結ぶ交通の大動脈として、大きな役割を果たしてきました。また風光明媚でも知られ、古くは「万葉集」や「古今和歌集」などに詠まれており、今日では訪れたい観光地として世界からも注目を浴びています。

現在の瀬戸内海にあたる地域に人々が生活し始めたのは、数万年前からといわれています。その頃の地球は最終氷期で海面が現在より低かったため、日本列島は大陸と陸続きであり、瀬戸内海も陸地でした。

その頃の人々は石器を主に使い、ナウマンゾウやオオツノシカなどの大型獣を狩る旧石器文化が展開していました。簡単な小屋や洞窟で寝起きし、獣を追って移動する生活を送っていたようです。

五色台・城山・金山からは石器の材料となるサヌカイトが産出し、中四国はもとより、西は九州から、東は東海まで運ばれていました。

県内の旧石器遺跡は羽佐島、櫃石島をはじめとする島々や、サヌカイトの原産地でもある国分台遺跡(坂出市・高松市)、城山遺跡(坂出市)周辺を中心として、県内各地で確認されています。

約1万5000年前から徐々に温暖化し、海面が上昇して現在のような瀬戸内海になったのは、約1万年前といわれています。

姿を消したナウマンゾウにかわり、人々は山でシカやイノシシを狩り、海では魚や貝類がさかんに採られるようになります。また煮炊きができる土器がつくられ始め、柔らかく温かいものが食べられるようになりました。このような豊かな食料資源を背景に、定住も始まります。環境の変化に伴い人々の生活や文化も変貌し、縄文時代という新たな時代が幕を開けたのです。

小蔦島貝塚(三豊市仁尾町)からは、約8000年前の押型文土器や石鏃などの石器、イノシシの骨、ハマグリ・カキ・ニシガイといった貝殻などが発見されました。県内では礼田崎貝塚(土庄町豊島)や小蔦島貝塚などにみられるように島嶼部で土器がつくられ始め、その後全域に広がっていきます。

今回の展示では国分台遺跡、城山遺跡の石器を中心に、瀬戸内で生活した人々の痕跡をご紹介します。

(宮武 尚美)



▲瀬戸内海の海底から引き上げられたナウマンゾウの化石

ナウマンゾウは日本列島とその周辺に生息しており、各地で化石が発見されています。肩高2.5~3mあり、現生のアジアゾウよりやや小型のゾウです。



▲国分台遺跡出土の石器

学名「サヌカイト(讃岐岩)」は約1300万年前におきた瀬戸内海地域の火山活動で噴出・急冷した溶岩です。たたくとカンカンと金属音がするので、俗に「カンカン石」と呼ばれています。黒色緻密で硬くガラス質であるため、石器の素材として適していました。



▲小蔦島貝塚出土の押型文土器

押型文土器は棒に山形文や楕円文を刻み、生乾きの土器面に押しつけながら回転させて文様をつけたもので、縄文時代早期の土器です。



## 第2展示室

### 久米通賢の見世物興行 「牛旋激水」と「養老瀧」

久米米左衛門通賢は、文化13年(1816)夏、大坂難波新地で、牛を動力源とした揚水ポンプ＝「牛旋激水」を利用して、高さ1丈5尺(4.5m)、幅2尺5寸(0.75m)の「養老瀧」と銘打った見世物を作って公開しました。文化文政期(1804～1830)以降、江戸・大坂・京などでは、さかんに見世物興行(細工もの、珍獣、軽業など)が行われ、人々の好奇心をかきたてました。久米の「養老瀧」もこうした機運を利用したものといえます。大坂で好評だったため、翌年以降、江戸浅草奥山でも公開しました。当館にはこの頃に作製された宣伝用チラシ「牛旋激水図」と「牛旋激水 牛曳碓 一器ニシテ二器ヲ兼タル図」の板木(印刷用原板)が残されています。これについては、『郷土博通信』No.3でも紹介しています。



▲①「養老瀧前拵帳」

今回は、「養老瀧」見世物興行の関連資料として、①「養老瀧前拵帳」、②「養老瀧大坂興行勘定書(仮称)」、③「養老瀧諸算用」を紹介します。

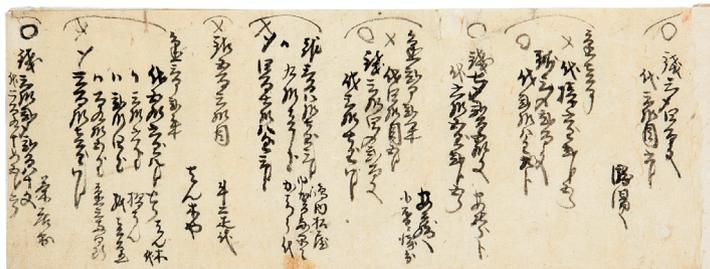
①は、帳面の表紙に「文化十三子年六月廿九日より」と記され、次頁からは、「養老瀧」の製作のために数多くの資材を調達したことが記されています。看板の絵や大提灯なども注文していて、見世物に集まる観客の目を引くための工夫をしていることもうかがえます。さらに「米左衛門様」あての収支の記載が複数確認できることから、この帳面は見世物の興行主が書き記し、後に久米に渡したものと思われる。

②は、表紙が失われていて欠損部分の多い帳面ですが、動力源となる牛2頭の購入代が銀530目(目)、<sup>もんめ</sup>「牛旋激水図」と思われる板木作製代56匁8分7厘、摺賃36匁、用紙代24匁などの記載が確認できます。また、大坂での「養老瀧」興行にかかわった両替屋や個人名が120ほど記されています。

③は、表紙に「文化十五年寅春」とあり、前年から新たに製作が始められた「養老瀧」の経費の内訳が記されています。ここでも、瀧板木彫刻賃82匁の記載があるほか、「養老瀧」製作のために動員した大工の延べ人数が395人になることなどが記されています。

これらの資料だけでは、何度か実施された「養老瀧」見世物興行の全貌をうかがうことはできませんが、断片的であれ、久米が農業水利の便を考えて、「牛旋激水」と「養老瀧」を公開し、この技術の普及と改良を熱望したと思われる。(齊藤 祐司)

※金1両(銀60匁)は、現在の13万円程度、銀1匁が2166円とする試算例があります。



▲②「養老瀧大坂興行勘定書(仮称)」



▲③「養老瀧諸算用」

●次回展示(10月～)は、「重要文化財 久米通賢関係資料修理展(仮称)」を予定しています。



## 第3展示室

### 小さな命のかたち



▲金魚大鉢

私たち人間は、地球の自然のなかで脈々と命をつないできました。

自然は、人びとに豊かな恵みと潤いをもたらしますが、時には、暴風雨、地震、火山噴火などの災害を引き起こし大きな被害を与えることから、人びとは自然に感謝し、安らぎを覚えるとともに、畏敬の念を抱きながら暮らしてきました。

そして、山や川や海に生きる生きものの生命力にあやかりたいという願望から、また、生命ある生きものたちを慈しみ、美しさに魅了されて、古くよりその姿をさまざまな形でさまざまな物に表現してきました。

香川県出土とされる弥生時代の『袈裟襷文銅鐸』(国宝)には、トンボ、イモリ、カマキリ、サギ、スッポン、トカゲなどの小さな生きものが、鹿を射る人、竝杵で臼を搗く人などととも描かれており、当時の人びとが自然とともに生きていた環境や心情などを窺い知ることができます。

日本の絵画では、自然の中の生きものは人びとの暮らしと密接なものとして表現されてきました。花や鳥や虫などを描いた花鳥画は、室町時代に中国の画風の影響を受けて盛んになり、桃山時代には日本独自のものとして、障屏画しょうへいが成立、発展しました。江戸時代には、琳派、狩野派、南画、浮世絵などの絵師により多く描かれ、優れた作品が残されています。近代になると、菱田春草、橋本雅邦、竹内栖鳳せいほうらの画家によって描かれ、日本画における花鳥画の全盛時代となりました。

自然の中の生きものたちは互いに関係し合い、命を循環させることで、命をつないできました。地球上に住む生きものとして人間は新参者ですが、自然と共生する未来への舵取りは人間に託されています。トンボやセミやカエルが、伝説の生きものにならないようにと願うばかりです。

本展では「小さな生きもの」をモチーフとした絵画、工芸品、陶磁器などをご紹介します。絵師や文人、あるいは芸術家たちの繊細な感性や、職人たちの大胆でありながらも洒脱さにあふれた匠の技を感じていただければ幸いです。

いろいろな生きものたちとの出会いをお楽しみください。

(吉久 由紀子)



▲視箱



▲『花鳥画集』



# 人形をめぐる対談 『人形——この未知なるもの』

第9回公開講座から  
菅原 多喜夫  
(翻訳者、四谷シモン・アシスタント)

四谷シモンの人形について、みなさんいろいろなイメージをもっておられるとおもいますが、今回の講座では、強烈な両親のことや状況劇場のことはあえて横において、もっと直接、人形づくりそのものに迫ってみることにしました(彼の生い立ちにご興味のある方は四谷シモン自伝『人形作家』をお読みください)。

とはいっても、人形づくりの話をするためにはなんらかの手がかりが必要ですが、今回の手がかりは、ドイツのアーティスト、ハンス・ベルメール(1902年～75年)です。四谷シモンは、1965年にフランス文学者・澁澤龍彦氏が『新婦人』という雑誌に書いた紹介記事によってベルメールの作品を知りました。

## ◆戦争と混乱のなかの少年時代

ベルメールはドイツ帝国のカトヴィッツという工業都市で生まれました。1914年に第一次世界大戦がはじまりましたから、戦争のなかで少年時代を過ごしたことになります。この戦争は18年のドイツ革命で終わりましたが、これとほぼ同時に、ポーランドがロシアから独立し、ドイツとカトヴィッツの領有を争いました。そして結局、カトヴィッツはポーランドに組み込まれてカトヴィツェと呼ばれるようになり、ドイツ系だったベルメール一家はカトヴィツェを去ります。晩年のベルメールはパリで生活していましたが、彼は、若い頃に「ドイツ」というアイデンティティをなくしてしまったのではないのでしょうか。

カトヴィツェを去ったベルメールは、ベルリン工科大学で学び、その後デザインなどで生計を立てていました。

## ◆ベルメールの時代のドイツ文化

ベルメールはどのような状況のなかで人形を制作していたのでしょうか。

ベルメールが最初に人形を制作したのは1933年です。33年というと、ドイツでナチスが政権を獲得した年ですので、これまでベルメールの制作意図では、反ナチスということが強調されてきました。しかし、実際に人形を制作したのは33年でも、それ以前になんらかの準備をしなくてはなりませんから、それを含めると、人形制作に関するベルメールの構想は、ナチス以前に遡ることになります。

ナチスの政権獲得以前、第一次世界大戦の終戦期から33年までのドイツは、一般的にワイマー



# 四谷シモン

日本を代表する人形作家「四谷シモン」と人形造りに関する「口」  
ナチス権力での表現責任はとまっていたドイツで反ナチのアーティスト、ベルメールが制作した作品に、戦争を受けてきた身体問題の人形作りを、戦争の勝利を待たずに生かされた人形作家「四谷シモン」の制作の軌跡を、出づり井田の文脈の中で探ります。

第9回公開講座・鎌田共済会100周年記念事業

## 人形をめぐる対談 『人形——この未知なるもの』

2018/10/27(土) 13時30分～15時(受付13時)

講師 四谷シモン氏 (人形作家)  
対談者 菅原多喜夫氏 (翻訳者、四谷シモン・アシスタント)  
開催場所 四谷シモン人形館 澁蕨荘  
参加費 2,000円 (入館料500円含む)  
定員 先着50名(要事前申込) (下記窓口にてTEL・FAX・HPいずれかの方法でお申込みください)  
申込 10/2(火)9時～受付開始 TEL:0877-44-2275 FAX:0877-45-0035  
鎌田共済会 郷土博物館 https://kama-haku.jp/entry\_simon/





ル共和国と呼ばれ、その文化はワイマール文化と呼ばれます。激しいインフレにも悩まされましたが、つかの間の平和な時代で、この時期、戦前のドイツ帝国で抑圧されていた表現主義、ダダイズム、シュルレアリスムなどの前衛芸術がベルリンを中心に花開きました。性的表現が増えてくるのもこの時期です。映画や写真など、新しい技術を活用した新分野の芸術や娯楽も急速に広まりました。20代をワイマール文化のまっただなかで過ごしたベルメールに、刺激的な新文化が強い影響を与えたと想像することは、困難ではありません。

ワイマール文化では、古典的で整った文化に対するアンチテーゼとして、潜在意識に働きかけていくことや人間のなかの幼児性の追求も盛んでした。そうした風潮のなかで、人形も重要視されてきます。自動人形への恋をテーマにしたオペラ『ホフマン物語』が何度か上演されますが、ベルメールは32年にユダヤ人の前衛的演出家ラインハルトによって演出された公演に強い衝撃を受け、自分でも人形をつくらうと思いついたのです。この計画は、先に書いたようにナチス政権下で実現しました。初期のナチスの政治活動は文化闘争という側面があり、ワイマール文化を退廃的として否定しましたので、この時期に制作されたベルメールの人形は、ワイマール文化を擁護しナチスに反対するという意図から、あえてグロテスクなイメージが投影されたという側面があるのではないかと考えられます。

#### ◆動く人形の衝撃

さて、65年に四谷シモンがベルメール作品の写真から受けた衝撃は、「この人形は動く」というものでした。ベルメール作品の表層的なグロテスクさに衝撃を受けたのではなく、四谷シモンは、ワイマール文化のなかでベルメールに人形制作を思い立たせた根源的なものをそこにみて、ショックを受けたといえるのではないのでしょうか。

それまで四谷シモンが制作していた人形はぬいぐるみで、一定のポーズをしたまま動きません。それに対してベルメールの人形は、身体の各部分を球体でつなぎ、各部分が自由に動く「球体関節人形」でした。ポーズがなければ、人形は、ポーズがもっている意味性から解放されるということが、四谷シモンに強い衝撃を与えたのです。ベルメール・ショック以降、四谷シモンは球体関節人形にのめりこんでいきます。

この時期に制作した人形が1体淡翁荘に展示してありますので、じっくりご覧いただきたいのですが、あどけない少女の人形です。技術的な完成度はまだ高くないにしても、これこそが、四谷シモンがベルメール作品のなかに見た原初的なイメージだったといえるでしょう。

#### ◆作品とタイトル

四谷シモンの作品は、頭を含めて身体の各部分が動くのが大きな特徴で、それ以上の意味付けはあまりされていません。人形によってなんらかの情緒や感情を表現することに、四谷シモンはあまり関心をもっていないのです。それを端的に示すのが作品のネーミングで、四谷シモンの人形のタイトルは「少女の人形」「男の人形」のように性別や年齢だけを示しているか、「機械仕掛の人形」のように素材や状態を示しているのがほとんどです。

これらは、作品解釈の手助けというより、最低限の約束事としてのタイトルといえなくもないでしょう。

#### ◆作者を投影させた人形

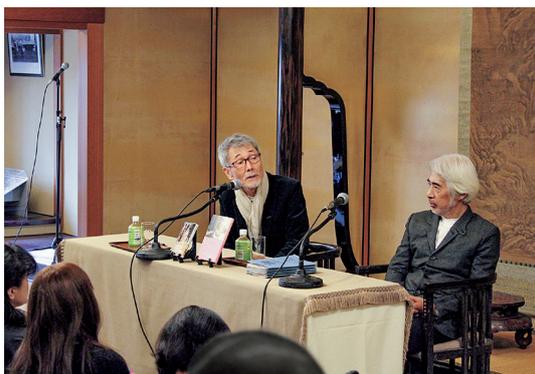
このように、四谷シモンは作品によって何かを表現するということに関しては控え目ですが、それでも作品が何も示していないわけではありません。もっともこれは「示す」と言っているのかわかりませんが、四谷シモンは、人形には作者のイメージが自然に投影されてくると語っています。



この事実は、四谷シモンが東京・原宿に人形教室エコー・ド・シモンを開き、人形制作を教えるなかで気づいたことで、生徒がつくる人形をみていると、意図しなくても、どこかしらつくり手に似ているというのです。それに気づいた四谷シモンは、一時期、あえて意図的に自分に似せた人形をつくるという試みを行いました。『ピグマリオン・ナルシズム』など、この時期の代表作も淡翁荘に展示されています。

人形が作者に似てくるというのはちょっと不思議な現象です。四谷シモンは、これは人間が根源的にもっている自己愛、つまり「ナルシズム」と関係しているのではないかと考えました。言ってみれば、作者の側のなんらかの意図を表現するための器ではなく、作者の意識を超えたところで、つくっているうちに作者自身を反映させてしまっているもの、それが四谷シモンのめざす人形なのです。

こうしてみると、出発点は、固定したポーズが不要の人形をつくりたいという方法上の欲求だったにもかかわらず、四谷シモンの人形づくりは、潜在意識と人間の行動や表現の関係に気づき、それを表層化させようとしたドイツ・ワイマール文化の問題意識と、非常に深いところでつながっていると言えそうです。



### — 公開講座レポート —

2018年10月27日、四谷シモン人形館 淡翁荘に四谷シモン先生をお招きして鎌田共済会創立100周年記念の公開講座を開催しました。

講座は、アシスタントの菅原多喜夫氏との対談形式で行われ、人形へよせる想いや制作のきっかけなどを、お話しくださいました。

また終了後のサイン会・写真撮影会では、先生の穏やかで温かいお人柄に触れることができ、ファンの方々には、魅力的で、濃密な時間をお過ごしいただきました。

ご参加いただいた皆さま、ありがとうございました。

命の輝きと、どこか愁いを含んだ人形たちに又、会いに来てください。

『閣龍世界博覧会 美術品画譜』について

(表紙解説)

世界初の万国博覧会は、嘉永4年(1851)にロンドンで開催され、その後欧米諸国を中心に次々と開かれるようになります。日本が初めて参加したのは、慶応3年(1867)のパリ万国博覧会で、江戸幕府および薩摩藩、佐賀藩が出展しました。その後、明治維新を迎え、日本が国家として初めて公式参加をしたのは、明治6年(1873)のウィーン万国博覧会からでした。近代化を目指す明治政府は、日本の文化を世界に示すとともに、欧米の技術や社会の仕組みを学ぶ機会として、多くの技術者たちを派遣しました。

明治26年(1893)には、アメリカ合衆国イリノイ州のシカゴで開催されました。クリストファー・コロンブスの大陸到達400年を記念して催されたため、「シカゴ・コロンブス万国博覧会」とも呼ばれ、正式名称の「World's Columbian Exposition」は、「閣龍世界博覧会」、「世界コロンビア博覧会」などと訳されています。コロンビア(Columbia)は、コロンブスに由来する名称で、「コロンブスの地(あるいは 国)」を意味し、アメリカ合衆国の古名として使われることもあります。

『閣龍世界博覧会 美術品画譜』(第一集~第三集)はシカゴ万博に出品された書画彫刻工芸品等を日本画家久保田米僊(嘉永5年・1852~明治39年・1906)が描き、多色木版刷にしたもので、明治26年から27年にかけて大倉書店より発刊されました。

米僊は京都で生まれ、鈴木百年に師事して日本画を学び、京都画壇の興隆をめざして、明治13年(1880)の京都府画学校創立に尽力し、開校後は教鞭を執りました。その後、同23年(1890)に国民新聞社にはいり、26年のシカゴ万博、27年の日清戦争の報道記録画を描くなど、時事風俗画に新生面をひらきました。

2025年には、大阪で国際博覧会(万博)が開催されます。テーマは「いのち輝く未来社会のデザイン」。人類の未来が「いのち輝く」ものでありますように。

(吉久 由紀子)

INFORMATION



■ 勾玉づくり体験講座

2019年7月27日(土) 13:30~15:30(開場13:00)  
会場:鎌田共済会郷土博物館2階講堂  
講師:香川県埋蔵文化財センター職員

- 勾玉は古代の人々が身につけていたアクセサリです。講座では軟らかい石を削ってつくります。  
※小学2年生以下の方は保護者同伴
- 電話またはFAXでお申込み下さい。  
電話:0877-46-2275 FAX:0877-45-0035

【申込7月2日(火)から、先着30名、参加料300円】

■ 第10回公開講座 次回予告(予定)

2019年10月19日(土)  
講師:宇都宮 正紀(株式会社修美)  
久米通賢関係資料の保存と修理についてお話いただけます。

鎌田共済会郷土博物館



**Access**  
高松から…快速マリンライナーで約15分  
岡山から…快速マリンライナーで約40分  
JR予讃線坂出駅から徒歩5分  
※駐車場あり

開館時間:午前9時30分~午後4時30分(入館は4時まで)  
休館日:月曜日/祝日  
夏季特別(8月13日~15日)  
年末年始(12月29日~1月4日)  
入館料:無料



▲『閣龍世界博覧会 美術品画譜』— 第一集見開き